

革命の通達

創刊号

目次

- 四三八 斗争でソビエト
- 期波斗争中固総括
- 情勢・任務方針
- 戦略論ノトトの

社会主义学生同盟教育大支部

理论社印刷

定価 50-

4. 28 安保沖縄 ― 震々 南占拠斗争に一大決起を

教育大のすへまの先進的学友諸君、社会主義学生同盟教育大支部より、すへまの学友諸君が二回まで筑波斗争の一切をなげ、四・二八斗争に死力を尽さんことを訴えたい。

我々の六二年羽田斗争以降のうち続く斗いは、六七年巨大な東大斗争を生み出し、一時の迂回を遂げながらも安保紛争、日帝打倒に向けた独自の前進をなちとしてつある。我々のさまさま敵線における斗いは、あきらかに日本階級斗争の新たな局面を切り開き、全世界的激初の時代、世界革命戦争の時代の端緒を築きあげようとしている。現時点においてこそ、そして四・二八斗争を出発点とする六九年政治斗争の途人民的爆発のななにこそ、これらの諸斗争をいかに総括し、これらの諸斗争のななに傷ついた多くの同志の意志と、そして全世界被抑圧人民の無数の声をいかに自らのものにするのな、といふべきな向われぬいるのだ。

ブルジョア的なブルジョアの理念を「守る」運動をばるかに突破し、八組織された暴力をもつて實際的に日帝主義の立場を獲得しつつある我々の斗いに対して敵力の愚づまるよつな弾圧が開始されていゝる。現在のには部分的に現象し、社会の表象をばるているかのように見える敵力のこのよつな動向が、実は、最後には市民社会の深部をも捉えつくし、プロレタリアートの諸組織諸運動のすへまを解体し、いくつマシスラムへのベクトルを秘めた動向であること、そしてそれら敵力の階級の本質にはなならぬいことを、我々の階級階級の本能ははつきりと知覚しておなねばならない。

そして、だからこそ、我々の今後の斗いは抜きをならぬ地上に立って行くのだ。日帝的には平和共存秩序、国内的には敵後民主主義体制として示された入古い秩序が決定的に無力化し崩壊していき、現実を前にして、我々がプロレタリアートの普遍

府をも、根柢的に人柱に秩序を解体させていく
の必、それともソビエトの上からの秩序破壊
の改編を許さず、再び予測しぬ入冬の時代を招
きよめるの必、この皇人民に選択をせまらざるをえ
ない政治的向かいをせり出で、るの現代なのだ。

日本が自主規制路線の破綻、市民主義文化人の擁
護が政策的にはきとられつつあること、社英人成
線がソビエトの体制内抵抗派なら予防反革命への転変
を、これら諸々の事態の示す意味とそれへの我々の回答
は、第一に、時代そのものか人新しい転換を必要
として行なうこと、第二に、こうした事態へのブルジ
コヤジの回答として国家権力機構の改編を頂点とし
集約点とする皇社目的な支配秩序の改編（ソビエト
くつし）のファシズムへの用意されていること、第三
に、我々のそれらに対する反響は、唯一、国内主義
と皇社革命を立脚点としてつつみ口独断立への実践的
運動を現代的に開始して行くことではればならぬ
はし、その方向のみがプロレタリアートを有効的に
獲得しうる路線となつて行なう、という三点である。

彼らの本質的運動方向とその発現形態との関連のた
みに見ていくという方法を自らのものとするならば、
我々は、現在の日帝の位置を日帝市場分割戦への再
度の登場という基本的視点ならば、きりと抱え返し
ておかなければならぬだろう。そしてそのような規定
的運動が、日米反革命軍事同盟内部のハゲモノ一戦
の再編強化（一時的には自動延長という迂回策をと
りながら）という形態をとつて行なうこと、さらには
実体的には極東における日米共同軍事行動の準備と
強化、国内統治様式の全面的再編（ソビエト再編）の
貫徹として野望されていることをも認識領域に含む
ておかなければならぬ。日米主義諸列強がその内部矛
盾の解決を相互の全面的な暴力的対決によつて
なしたなくなった要因は、オニ次大戦後の階級関係
の変動を基礎としてつつも、特殊の具体的には（労働
者日家の存在）階級矛盾の外化された形態としての
「体制内」矛盾、①オニ次、オニ次の大戦が不均等
発展の解決をもたらすものならばなつたことば言う
までもなく、逆に米帝の圧倒的地位の確立を結果と
したこと、②先進国間水平分業の増大、として示さ
れるだろう。へ新しい時代への転換はブルジョア

ジの側ならば、このように日米主義的發展なる本
質的衝動につき動かされた権力再編へなしくづし
ファシズムへの志向として提起されているのだ。

この決定的攻勢を前にして、社英を政策的表現する
市民主義者、一進歩的の文化人等を巻き込んだ人民
戦線プロレタリア、自らの存在の危機を革命的左派へ
の予防反革命として外化しつつも、結局はソビエト
よつて粉砕されいく無かな幻想的な存在でしな
いことを強く銘記して置く必要があるだろう。と同
時に、この現象が、大衆の膨大な自然発生性（現在
的に）反、反革命として表現されること、引き出
して行なうこと、そしてそれをいかに集約し指導し扱
くならんか我々の「史的任務の重さがあること」をも
確認しておくこと。言い換えれば、政治「日帝への参
加を即時的に希求する大衆に對して、我々が「展望
」未来へむきか具体的な与えまいくのなか美脚的
課題として問われているのである。

我々社会主義學生同盟は、この課題への回答をへ
中央権力斗争とマッセンストライクという革命の
型とそれを担うソビエトプロレタリアン運動として
提起してきた。日米、東大斗争を始めとする全日帝

日米斗争の連続的な発展とそれを継承して高揚するた
るう全人民的政治斗争の液は、我々のこの基本的路
線の具体化と豊富化を迫つて行なう。

個別斗争と全人民的政治斗争との相互関連性を統一
戦線の最高形態「ソビエト型組織のさきま」な戦線
、組織における確立の問題として主体的に抱え返し
、同時に中央権力斗争を戦略的に提起することによ
つてあらゆる形態の「ソビエト型」の組織の形成を
断乎たる実力斗争の領域を拡大していくことにこそ
あるのだ。「日帝回なら日家へ」という共学同盟諸君
の空語が、実は、へ特殊なならへ普遍を展望する
組合主義政治の戦闘的表現にほかならないこと、そ
して彼らが政治斗争における独自の戦略を欠落させ
、もっぱらハ中委及大衆路線ばかりの情勢一任ム方針
という一般説としてしなへ政治を語りえまいない
という点にその本質が現象していることを併せて見
ておかなければならぬ。勿論、この両斗争の関連を、
同時に斗争、としてしな運動的に表現しえぬ革命マル
系諸君の誤謬（というより犯罪性）は挙げて批判す
るまでもななる。

筑波斗争の窮極的な發展の方向は、なによりも全人民的政治斗争（安保、沖縄斗争）への飛躍とそれを中心とする学生斗争のコミニオン型組織への具体的改編（へた力）を展望する反帝統一戦線の形成にある。来る四、二八斗争こそこの正否を問われる最初のそして決定的な契機なのだ。

我々はこの四、二八斗争を日帝ブルジョアの沖縄最前線基地化、七〇年安保再編強化へ向けての幼向を全面的に攻撃的にバクコロしていく闘いとして、そして司法権力のファッショ化、中教審管申等々に見られるブルジョアの秩序的強権的改編を阻止し突破する闘いとして、さらには学生斗争を政治斗争を闘いとする学生評型組織へと改編していく闘いとして設定し、教育大學生運動の絶力をなげ、覆々閣一政府中枢占拠を断平として實現していかなければならぬ。平務校等々の反革命の壁はすでに張りめぐらされている。我々に戒せられているのは、たとえ部分的に否はあれ、この反革命を死力をもってつき破り、自衛権力の威信を地に落しめるとともにブルジョア政治に対する根底的批判とそれにより変りうる我々の政治の内容を、具体的行動を通して全人民に提起すること

とせしなない。

筑波移転能力阻止斗争を決してそれ独自の完結をもちえないこと（II改良の果實そのものはある意味では常にブルジョアの秩序の再編にほかならぬ）としてそれを止揚する方向こそなまじに全人民的政治斗争への先進的方決起にほかならぬことを自ら胸斗争への総結集を再度、緊急に訴えたい。

日帝打倒 / 安保 / NATO
粉碎 / ベトナム革命勝利 /
沖縄 II 日帝の侵略前線基地
化阻止 / 米軍基地撤去 /
米軍政打倒 /
政府中枢を労学十万人
力で埋めつくそう /

筑波斗争 中間総括

へはじめに

東大、日大斗争を頂点として斗われている全同学斗争は、文字通り政府、支配者階級を震撼せしめ、帝国王義に対する学生の総反乱として、70年安保斗争へ向けその巨大な進撃を開始されたことを全人民の前に知らしめていいる。とりわけ東大安田解放講堂における学反諸君の決死の闘いと、それに呼応して神田地区における街頭バリケード闘争、これまでの単闘斗争の負を根底的に転換せしめ、個別的階級的闘いとしてあった諸単闘斗争を結合し、更には広範な労働者、市民を巻き込んだところの闘いとして、単闘斗争が全人民的政治斗争へ飛躍、発展したことを物語ったのである。

以上のような六八年、六九年における単闘斗争の高揚の中にあつて、我が教育大にあつても、決してその波かしのなれることはできなかった。いやまさに教育大斗争が東大や日大斗争と同じように、全同学闘争の先駆としてあり、二五〇日にも及ぶ闘いが断固とした奥力斗争として斗い抜かれたことを、

我々はハッキリと自賞しなければならぬ。しかし、現在、敵権力の先によりて我々のバリケードが破壊され、ロツクアウト、并初隊常駐という困難な局面にただされている。

このような中にあつて、我々はこれまで斗われた教育大斗争の中間総括を行ひ、今後の闘いに対する断固とした意志一致をもちとっていかなければならぬ。

我々の総括は、まさに現実の運動から出発しなければならぬ。一切の観念的、空論的総括をいくら行つても一物の足しにもならぬ。現実の運動から生じた問題を克服し解明することによって、今後の我々の斗争の方針と展望が設定されるのだ。

まず総括するにあつての我々の視点を確認しなければならぬ。その視点を我々は次の点に設定する。すなわち、70年安保を中心とする全人民的政治斗争と個別単闘斗争との結合の問題であり、はたしてこの教育大斗争がどのような全人民的政治斗争の飛躍の場と成り得たのみとどうなるかということである。そしてこのことを、我々は斗争の過程における主体の形成と組織的負II団結の負を中心に進めてい

かなければならぬ。

第一章 筑波斗争の歴史と論理

第一節 筑波移転の持つ意味

まず我々は筑波移転の持つ性格を、日本資本主義の社会的分業の再編と大学の位置の変化ならとらえがえしていかなければならぬ。

現在のハの教大に及ぶ学回斗争の持つ意味は、全社会的に進行しつつある日本資本主義の新たな社会的分業体制の再編に基因し、その一角を占める大学の帝國主義的再編に抗する斗いとして爆発していることとまず確認しなければならぬ。

すなわち、五の年代後半のEPIF体制の崩壊によって本格的に開始された帝國主義的均等発展の六の年代を通じて激化し、實際市場分割として、帝國主義的相互の先進口、後進口市場に対する競争戦となつて進行している。このようなかで、日本帝國主義は、この實際市場競争戦に勝ち抜くために、国内における巨大独占体間の合同、合併、合理化を進行させ、更に上部組織にあつては、自衛隊の強化、帝國主義軍隊化、排外主義イデオロギーによる

ルンペン的人格形成のための教育をうたり、その管理運営面における権限の集中化は、理事会の設置や、副学長制の権限の導入等々として更に高度化されてきているのである。

一に我々は、筑波移転の本質が現在の政府、スルジョアジによる大学の帝國主義的再編のモデルとして、二の教育大を移転、改編するものであることを見抜くのである。

それ故、我々の斗いは「筑波移転」大学の帝國主義的再編粉砕」として斗われているのである。

第二節 斗争の過程

① 日共の民青の破産

文部省を中心とする六八年筑波斗争が、無期限バリエード、本館封鎖斗争として斗い抜かれた根拠を、六七年の日共の民青によつて指導された斗争との対比の中から明らかにすることによつて、日共の民青の単国民主化斗争論の破産を大衆的に確認しなければならぬ。

数年前にわたる筑波斗争の中にあつて、そのインシアを取り續けてきた日共の民青の「単国民主化斗

民結集、権力の膨張等々の帝國主義的政策を押し進める中から、東南アジア市場に対する勢力圏確保のため、その侵略、反革命を開始しているのである。

しかも、これら日帝権力の實際的国内戦略は、大衆をして、ますます中央集権化した排外主義労働力商品の生産の場とし、侵略、反革命政策貫徹のための支配イデオロギーの产出に参与するものへと全面的に再編せんとするのである。

自主技術開発を軸とする研究、教育体制の改編という日帝スルジョアジの要請は、大学院大学化構想に象徴される大学の目的別再編成、産学協同政策の推進を拡大せしめて行っている。このような日帝の国内分業体制の帝國主義的再編の重要な環としてある大学の帝國主義的再編は今まさに進行しているのである。

筑波移転問題は、こうした日帝の研究、教育体制再編のための、モデルとしてある「筑波研究学園都市構想」に対する是非の本質的問題なのである。しかも、出来上がる「筑波大学」の内容は、既に知る通り、国家社会の要請に応えた科学技術の振興と大

争」は、目的にも敗北していつても六七年のストライキ斗争によつて至極的に至はあれ、その破産は多くの学友に於て確認されていった。

彼等のマニフェストした教授オルグと話し合い路線が我々の大衆団交獲得、土地確保自給撤回にとつて、全く有効性を持ち得なかつた。事実、日共の民青の筑波斗争からの後退の根拠であり、彼等からの大衆の離反の根拠であった。

しかし、我々は日共の民青に対する学友の自然発生的な発火と反感感情のみにとどまらなければならぬ。彼等の指導路線が「単国民主化斗争論」に存り、二の誤りをこきくわしていかなければならぬ。

彼等の最大の誤謬は、日本資本主義の対外膨張に規定された全社会的な帝國主義的再編の一環としてある教育大の筑波移転問題を、大学運営や審議過程の非民主性の問題にすぎず、筑波移転阻止斗争を不断に単国民主化斗争へと歪曲して行くことにある。

二のとき、我々は「昨年の六、一」の土地確保自給撤回の斗いの中にその典型を見るのである。すなわち、彼等は六、一〇決定の是非を筑波研究

學國都市、あるいはその一の教育大の移転を焦点とする形において把えていくのではなく、決定の非民主性、ルールの違反を問題とする二点に力をつけて、その無条件民主か非民主かという二点に設定してしまふのである。

二のような彼等の問題の設定は、大衆の目を筑波から不断にそらせ、大衆自身の筑波への主体的対決を回避せよという犯罪的役割をはたしていくのである。そして筑波斗争における大衆の組織化についても同じことと言えるのである。彼等は、筑波移転の本質的解明を「米白反動による産軍協同」であるとか、「大衆の一部団体の利益に從属させるもの」としてなし、他方、學生に対しては自己の生活利害である、アルバイト、勉強条件の劣悪化や決定の非民主性の次元を宣伝し、組織化するのである。

二二においては、大衆の立ち上がる契機を自己の即自的要求にのみ求め、あとは悪の根源たる米白反動を認識すればよいとする、大衆蔑視、大衆操作主義があるのである。

たしかに、当局が「マルシェヨア民主主義」と名定した二二に力をつけて、二二を遂手に利用し斗争を展開

この二二は、組織化された形を、即ち斗争の形として描き出された。しかしながら、この斗争は、我々の斗争を不断に学園改良に流し込み、体制内化させるものではない。その説教主義的体質をより純化させたもの、他ならぬのだ。

本館封鎖・バリケード斗争

八八年の六・二の調査と許上と端を繋する斗いは、確かにその決定の方法が非民主的であったにも関わらず、多数の學友は聖戰的ではあれ民主主義を護衛するのりこそであった。この事は現象紛争のストライキが大衆的に確認されたことであらわされている。即ち、我々の斗いは「大衆の帯回主義的再論としてある筑波移転に対する斗い」として、目的意識的斗争として展開されていく質を持ち得たのである。

更に、調査と許上白紙撤回や、「大衆団交等の改良結果を勝ち取るためには、単なるストライキも解放戦形では不可能であり、戦術形態を高度化しなければならぬ」という事が昨年との対比の中で、聖戰的斗争とこれと対比する。

そして、このように大衆の自然発生的高揚は、本

闘する二二は可能である。しかしながら我々にとりて問題なのは、そのような「形式性」や自己の個別利害にもとづく改良的要求自身はあくまでも既存の「大衆共同体」を前提とするものであり、更には資本制社会を前提とするものでないが故に、二二における大衆の意識は日常的なものである、そればかりに突破するものである。まさに問題なのは、「マルシェヨア民主主義擁護や改良的要求に結集」してくる學友を運動の過程において、いかにマルシェヨア的工ゴとしてある自己を否定し、帯回主義打倒という階級主体にまで高めあげることかということなのである。特殊策謀斗争において、二二のことは筑波への主体的対決へ向けての指導でなければならぬ。

このような指導路線は、ニカ月にわたるストライキ斗争のなかにおいて、その形成された団結の内容が日降的なものでしかなく、たが故に學生大衆がストライキの長期化と自己の日降性との対決の中で、それを止揚できないままに斗争が崩壊していくという結果を生んでしまった。

彼等、日共共民青の「学園民主化斗争」は、今年

本館封鎖・バリケード占拠の果敢斗争として結果として

二二においては我々が見なければならぬことは、その戦術形態における左傾化が直接的にも、間接的にも、日共共民青の民主化斗争に対する聖戰的反響をバネとして、更に、学校当局の評議会の強行的な姿勢に対する自然発生的怒りが要因であり、あくまでも自然発生的高揚であったことである。二二において我々に要求されたものは、まさに「革命の左派がこの運動の自然発生性を止揚し、その思想一戦略の下に斗争を指導し、抜き、大衆總体の階級意識の形成を固めていく」ということであった。即ち、確かに本館封鎖・バリケードストは、改良的結果を獲得するための大衆当局に対するプレッシャーとして、高度な戦術形態としてあつたわけであるが、しかし、我々の斗争戦術は当局に対する果敢な行使としてのみ意味をもつものではなく、我々の筑波移転阻止という課題そのものが資本制生産様式の矛盾との対決という質を内包していることであり、その斗争戦術はさうした意識性を表現するものとしてなければならぬ。その意味で、本館封鎖・バリケード

ドスト斗争は、資本制生産様式に基き置く社会的分業体制の一角を占めていた大学に対し、我々が一時的にこれをマヒさせ、破壊することによって、我々の斗争の負そのものが階級社会の廢絶—分業と私有の廢絶を展望するものであるという意識性の表現であり、更にこのことは、大衆にとつて、自己のこれまでの存在基盤の自己否定を通じて、主体変革を促すものであった。こうして我々の本館封鎖、バリケードストの持つ意識性を革命的左派の大衆の中に持ち込むことが必要であったのだ。にも水がわらず、全斗総体としては「戦術を單なる戦術」として水位置付け得ななつたが故に、尊友の自然発生的意識を止揚できえなかつたのである。

③ 入試中止をめぐる動向

一切の収指策動が擧げられた段階にあって、大学当局は四月28日突如入試中止未定を行った。この入試中止の持つ意味が一体何であつたのかを我々は再度確認していかなければならない。

大学当局は毎集公等口の収指策動がすべて我々

に粉砕され、一切学園正常化の見通しがつかなくなつた段階において、最後のたのみを「入試問題」に託したのである。すなわち「入試」は単に学内問題ではなく、大学と市民社会をつなぐブルジョア文壇形態の一種式としてあることによつて、これを「社会問題」なるブルジョアの表現をもつて「入試実現」を学園正常化の手段として最大限利用し、その打ち「社会的責任論」によつてなそうとするものであった。それ故に「入試中止」未定は我々の斗争に對する収指策動の役割を果すものであった。しかし、我々はこの「入試中止」を単にその時点における現物としてのみ捉えるのでは決定的に不十分であつた。すなわち我々の手いかにこのよう収指策動をもハネのけ、「入試中止」が最終的に未定されるならば、教育大の特殊性から見て、その時点において大学の崩壊、破壊へのなしくずし移転は十分に考えられるものであつたのである。

早く収指策動を促していたことである。まさに彼等は視野を「学内の弊」にだけ限定して問題を立てようとする個別改良斗争論者としての本體をバリケードしていつたのである。

このしながら我々を除く一切の他勢力はこの政治過程を適確に把握できなかったのである。日共、民青は「入試中止」大崩壊にへむ政治過程を強調しつつも、彼等の理解そのものがこのおのり当局の強権的弾圧政策に抗して手い拵くという立場でないが故に、当局が願っていた「収指策」として登場してきたのである。すなわち彼等は「入試実現」を掲げ、我々のバリケード破壊に狂奔し、その下でブルジョア派としての自己の本體をバリケードしていつたのである。

他方、革マル派にあつては「入試中止」という事態を単に我々の斗争に對する収指策動としてのみ捉え、「入試中止」反対となる意識的スローガンを掲げて文部省を提議していつたのである。ここでの彼等の誤りは入試中止が単なる叫喚としてのみ提議するのではなく、「入試中止」を根に政府、文部省の教大斗争への介入という事態をとらえ、それとの対決をいかに大衆的に準備していくのかという点を

「入試中止」の最終的未定は、我々の主体的立場からとらえるならば、まさに我々の破壊斗争が「敵口」の再編粉砕の斗いとしてその普遍的質を實現させていくならば、一切の改良に満足することなく非妥協的に斗われ、しかも「入試」という大学と市民社会とのブルジョア交通形態をも切断して突き進むのであるということを示したものである。更に政府、ブルジョア派は、このよう我々の斗いに對して、そのブルジョアの秩序的回復をめざし、料動隊導入、ロッキアウツの攻撃としてその階級的暴力性を持って斗争破壊に乗り出すのであり、我々の任務はこうした自家の介入に對し、それと如何に對決していかのかという視点を大衆斗争そのものの中に大胆に持ち込み対決を準備していくということではなかつた。

全斗斗争派としてあつた共学闘、ドントの対応の犯罪性は、「入試中止」の政治的煽動の面のみ

「強調することによって、予想される回家の介入に
かして大衆的準備を日知っていったという事である。
このことがその後の2、24日における混乱を招
いたことを我々は強調しなければならぬ。

④ 村動隊導入、ロツリアウト

2、24日、官専学長代行は、官専に對する所信表
附集思しなるものをデツク上げ、これを布石とする
形において28日村動隊導入、ロツリアウトを断行し
た。

資本制生産様式の下における大学がその社会的局
業の一角を担うものとして、労働力商品の産出と雇
の役割を果さなければならず、この大学を我々が占
拠し、その大学の社会的使命の機能をズトップ下
せていることは、政府、ブルジョアジーにとって許
されぬものであり、それ故、彼らは自己の資本制
企業体制の維持と機能回復を達成すべく直接的物理
力「暴カ」を行使したのである。このようにして、我
々の前に回家が登場することにより、「大学共同体
」の回家から相対的自立なる幻想は打破され、同時
に回家そのものがその階級的暴力性をむき出しにす

ることによって、我々、筑波斗争を争っているもの
に對して回家に對する一切の幻想性が打破されたの
である。

このような当屆、双方の一体化した我々の斗争に
對する反革命に對し、我々はそれとの對決を十分に
なし得なかつたことを総括しなければならぬ。

既に述べたように、28日のロツリアウトの事態は
入部中止最終決定の段階から予想されていたのであ
るが、それにもかわらず我々は斗争が組織的、思
想的準備をなし得なかつたが故にあの混乱を生んで
いったのである。二二における問題は、しかしなが
ら単にこの情勢把握における誤りにのみ求めること
はできない。

重要なのは25、26日にわたって展開された筑波斗
争においていかなる団結の質が形成されたのかとい
うことである。すなわち28日の事態において露呈さ
れたものこそ、形成された団結の質が学団主義的、
細部主義的なものでしかなく、斗争の過程における
大衆の主体形成の階級形成がなされず、主体そのも
のかいまた自然発生的意識を止揚でき得ていなか
たということである。我々が止揚しなければならぬ

か。たのは、この自然発生的性であり、革命的党派の
目的意識的指導の欠如であった。斗争がぶち当たる様
々な局面の中にあつて、革命的左派がその国共産主
義的内容の提起と革命戦略の提起によつて目的意識
的に大衆を組織化し、改良的要求に結集してくる学
友を階級的主体へと高めていかなければならなかつ
たのである。我々はこのような指導性の欠如を至学
生主義として存つた共学団の理論的内容と指導の回
題として批判していかなければならない。(ハヤ三章
に展開する)

かに運動の中に実現させ、その相別的「階級的」手
の限界性を止揚していくのがかといふところに存在す
るのである。

このことは次のことを意味している。すなわち我
々がこの筑波斗争を争う中で自己の相別的「階級的」
矛盾を階級的「継続的」矛盾として自覚した主体を形
成し、かかる「ハヤ三章」強化にさせられれた組織を
拡大することを通じて70年安保斗争に付けての「批
点」をこの教育大の中に形成していくといふことで
ある。

それ故我々は筑波務転阻止といふ課題の獲得に向
けての斗争の中で、それの内包している皇人民的質
を不断に実現させることによつて、大衆の階級意識
の形成と階級形成の来るべき権力斗争へ向けての革
命的「ロツリ」の陣地の形成を追求していかなければ
ならぬ。この立場を貫徹するものとして革命的
教団主義があるのである。

ハ二五章 筑波斗争に何が問われていたのか

ハ二節 相別斗争と皇人民的政治斗争

我々の筑波務転阻止斗争は確かに「教育大の筑波
務転反対」として相別的斗争であり、同時に学生と
いふ特殊階級的斗争であつた。しかし我々は斗争が
相別的「階級的」斗争であるからといって、その斗争
に相別的「階級的」質をばめしてしまうことは許されな
い。

すなわち我々に對つて筑波務転阻止そのもの「改
良の果実の獲得は第一的に大衆運動の勝利として
語られるべきではない。改良的成果をそれ自体は求し
て問題の根本的解決ではなく、矛盾はまた同じよう

我々の任務は帝口主義的再編に對決するものとし
て、筑波斗争が内包していた皇人民的普遍的質をい

て、我々の任務は帝口主義的再編に對決するものとし
て、筑波斗争が内包していた皇人民的普遍的質をい

は、あるいは変容した形態を持つ問題として発現
することを確認しておかなければならない。その意
味で、我々の革命的敗北主義の立場は階級形成に
を根本問題があるのである。

これらのことを前提的にふまえて、我々は
学回斗争を持つ同別的階級的陣をいかに突破する
のかということを明らかにしなければならぬ。こ
れを東大斗争を中心とする全学回斗争の到達した
地平との関連から以下に展開していく。

昨年10月8日以降の階級斗争は全学連、反戦の突
出した斗争を中心に膨大な大衆を結集させつつわ
た。その質は単なる政策阻止斗争ではなく、帝口主
義の世界的再編の中で、自らの野望を東南アジア
侵略革命としてその基本戦略を遂行している日本
帝口主義との根底的対決をせざるものとしてあつた。
昨年の10、21の大暴発はこのような反帝斗争が明確
に70年中保斗争を射程においたものとして意識的に
斗い抜かれた結果としてのものであつた。この10
21斗争においてはそれまでの同別学回斗争によつて
形成された基盤をもとに康大、日大として教育大を
始めとする同別的大衆が防衛隊、新宿、口風へと登

場したのである。このことは自然発生的には前記
二れまでの全学連、反戦が形成して来た至人民政
治斗争の質が同別斗争の中に持ち込まれたことを意
味している。

このような同別斗争と政治斗争との自然発生的結
合は11、22の康大における全学連の起爆を至る中
で学回斗争そのものが全学的結合を開始すること
よつて「大学の帝口主義的再編崩壊」として更に強
化され、遂にはあの1月8、9日の東大母田解放議
堂の攻防戦と神田街頭バリケード戦が広範な学回者
人民を巻き込んだ斗いとして、これまでの革命的左
派が勝ちつた至人民的政治の質を最大限結集させ
る中から東大斗争それ自身の至人民的政治斗争の飛
躍を勝ちとつたのである。

二二に見るものは政治斗争の質を同別斗争におい
て獲得するためには、その同別にかけられていた攻
撃が至人民の職業の帝口主義的再編の一環であると
いう認識の中から帝口主義そのものとの斗いの質、
すなわち至人民的政治斗争を媒介、結集させてい
なければならぬことであり、軍には他の諸階級
諸階級との連帯を勝ちとる中から、新着階級との

結合を下口レタリア統一戦線（現在のには全学連一
反戦による反帝統一戦線）として実現するといふこ
とである。

我々は同別斗争それ自身が自然成長的に政治斗争
化するなど考えることはできない。申請されてい
るのは革命的覚悟による意識的な至人民的政治の持
込であり、同別斗争と政治斗争との結合である。

我々は教育大斗争がいまだこのよひな斗争と
して展開されておらず、その内包されている普遍的
至人民の質を實現できていないことを痛感する中か
ら、その克服する方向を以上述べた二二の至人民
的政治斗争の一環として斗い抜くことに求められ
なければならない。

第二節 組織論的総括

我々はこれまでの攻撃斗争を具体的に担ってき
全学斗争委員会の組織的位置付けとその限界を明ら
かにする中から、今後の革命的再編へと向けての斗
いを準備していかなければならない。

教育大における全学斗争の性格は、その中心母体で
あった文芸委員会がボツカム自治会に基盤を置く同
法組織であり、他方他学部における斗争委員会は

年青のフランクシヨンの組織の裏を返せば他学部にお
ける同学斗争部も既製のボツカム自治会を前提とし
て活動している（であるように、ボツカム自治会を
基盤とする大衆的斗争特例であり、その特例におい
ては年青との対抗上作られた斗争特例）反年青諸境
線の統一斗争特例であった。

我々は、まぎもつて、そのボツカム自治会を基
とする大衆斗争特例という性格の持つ限界性を文自
斗の再効を中心に明らかにしておかなければならぬ
い。二二においては、たしかに全学大衆において多
数派になることになつて、その「自法性」が与えら
れ、同時に大衆性が与えられなければならない。しかしな
らう、我々が負って取りなればならないのは、二の
自法性は我々にとつてボツカム自治会であり、重要
なのはその組織内における団結の質の問題である。こ
れが足りない。すなわち、二れまでのボツカム自治会
を支えていた理感が、いりゆる民主主義の法理感、
法制民主主義であり、その法制民主主義において多数
派を占めることが斗争を展開するにあつた。このボ
ツカム自治会と、一学回大衆において決定された
ボツカム自治会とを区別するマルシヨマ形式民主主義が

我々の斗争を支配し、我々自身の斗いが「学生大衆」に向けての組織化が重要となつてしまつたのである。

その一例が、「入試中止問題」を我々に、日共は「民権が明確に收拾派として登場して来た段階にあつて、その対策を「学生大衆」における「決闘」に求めてしまつたことにより、無内容な学生大衆を4回もくりかえすことになつて、大衆の「日共」民権の主体的

対決への組織化を我々の「技術主義的乗り切り」が我々の方針とされてしまつたのである。このようないことは、文斗委その自身が「改良主義」の産物であり、形成された団結の内容も、小ブル民主主義的

なものでしかないという限界を露呈したものであつた。総じて、学生斗が「中心的には文斗委」的形態を以つて、当初は大衆の前面に登場する即断組織として存在しているとしても、我々の運動の非妥協性（永続性、暴力性）により自らの「民権」と大衆

の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。我々の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。我々の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。我々の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。

の明確な收拾派として登場して来た段階にあつた。この対決を「学生大会」における「決定」に求めてしまつたことにより、無内容を学生大会と血度も繰り返

すことになり、大衆の「日共」民権との主体的対決へ組織化を忘れた「技術主義的乗り切り」が我々の

とされてしまつたのである。これらのことは、文斗委その自身が「改良主義」の産物であり、形成された団結の内容も、小ブル

民主主義的なものでしかないという限界を露呈したものであつた。以上、全学生大衆（中心的には文斗委）合法的形

に存するものである。我々の運動の非妥協性（永続性、暴力性）により自らの「民権」

と大衆の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。我々の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。我々の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。

の明確な收拾派として登場して来た段階にあつた。この対決を「学生大会」における「決定」に求めてしまつたことにより、無内容を学生大会と血度も繰り返

すことになり、大衆の「日共」民権との主体的対決へ組織化を忘れた「技術主義的乗り切り」が我々の

とされてしまつたのである。これらのことは、文斗委その自身が「改良主義」の産物であり、形成された団結の内容も、小ブル

民主主義的なものでしかないという限界を露呈したものであつた。以上、全学生大衆（中心的には文斗委）合法的形

に存するものである。我々の運動の非妥協性（永続性、暴力性）により自らの「民権」

と大衆の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。我々の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。我々の共同利害の対立を繰りかへしてしまつた。

の明確な收拾派として登場して来た段階にあつた。この対決を「学生大会」における「決定」に求めてしまつたことにより、無内容を学生大会と血度も繰り返

な

い

は

な

い

は

な

い

は

を持たなければならぬ。
二のことが来るべき70年代後半の闘争へ向けての、我々の組織的形態であり、我々な言うところの単回闘争と斗い抜く中から単回闘争へ向けての陣地の形成の具体的な内容である。

第三章 共学同批判

この筑波闘争を「指導」し常に「主流派」として存在して来た共学同の理論——大学闘争論に対する批判を展開する。

彼等は、この間の筑波闘争の中で自己の大学改革闘争論の「深化を勝ちとった」といつているわけであるが、その組合主义的、構造改良的性格は何等変つてゐるわけでは無い。そのサンディカリスムの体質をより純化してゐるといふを得ない。

我々は、このことを「新しい前進」No.35の中の「忍唯論文」大学改革論の更なる深化のために「と」須田倫の論文「母としての学生運動と主体形成」を機当する中から批判を展開していく。

彼等は、前者の論文の中で、これほどの武闘理論の不十分な点として主要に次の点を付け加えている。

現在のブルジョア的体制の一角を占める大学をプロレタリアのものとして奪取し、プロレタリアヘゲモニーの下に「知的生産の秩序の確立」を行つていくことに同意があるわけであるが、ここに我々は彼等の政治革命から切り離された社会革命を夢想するサンジカリスムとシマの本質を見るのである。

すなわち、大学における学生の一時的占拠を通じて、既存のブルジョア的体制を破壊し、「学生権力」を樹立しようとも、そのことを持つて、大学を自己自身の現在の形態と異なる形に変革（知的生産秩序の新たな形態の創出）することを夢想できない。我々はまずもつて、次のことを確認しなければならぬ。すなわちブルジョア的体制が学生権力を有している限りにおいて、物質的諸関係は資本制的生産関係として存在してゐるのであり、プロレタリアートが自ら支配階級に高めない限りにおいて社会革命は遂行されない。このことあり、大学における「知的生産秩序の新たな確立」も又このことからのみされることはできないのである。そうであるが故に、彼等が「大学内におけるブルジョア的権力の分析と之

①「現代革命における大学改革闘争の位置」②「大学内におけるブルジョア的権力の把握」③「闘争主体の運動論と組織論の提起」である。我々はまず①の点から検討しなければならぬわけであるが、結論的にいって、彼等の大学改革闘争は、「社会革命」の自己完結であり、政治革命をめざした戦略からの闘争の把え返しがなく、そのことを②の向是を解明しようとするわけであるが、それ自体が組織主義、至善主義であるということである。

その典型が、学生権力論である。彼等の論点は、「大学をブルジョアヘゲモニー装置からプロレタリアートのそれへ改編することであり、そのためには、大学をブルジョア的のヘゲモニー装置から解体し、プロレタリアヘゲモニーによる新たな知的生産秩序の確立が必要である」とする。そしてこれを担うものが「学生自身の自己権力化——学生権力化」とあるとするわけである。

まず我々が向是としなければならぬのは、「大学内におけるプロレタリアヘゲモニーの形成——新たな知的生産の秩序の確立」とこれについてである。

これに於けるプロレタリアとシマは「実体的な大学改革闘争」——即ち教授会の解体と、講義制の解体とを指し、シマも、そのような大学内における「ブルジョア的配材」を統括してゐるところの「国家権力」の闘いを、いかにせよ、それに向けて大衆をいかに組織していくのむとびつた観念がない限り、単なる改良主義へと転落するのである。現在の70年代階級闘争へ向け、その革命戦略（政治権力奪取へ向け）の必の向系にも要求されてゐる中で、いまだ政治革命と社会革命の区別と連関を認識できずに、社会革命を夢想する共学同はあわれみである。たとへば彼等が現代論との関連から「不断にブルジョア社会権力体系を破壊し、市民社会内部にブルジョア権力への対抗権力の構築を目指し、プロレタリア革命の陣地を構築する」といったとしても、要求されてゐるプロレタリア革命の戦略が提起出来得ないが故に、その言葉自身かむなく聞えるのである。

我々のこのような批判に対し、彼等は大学改革闘争はあくまでも、プロレタリア政治革命へ向け、その主体形成に力点があるのだと主張し、その主体形成を提起してゐる。すなわち、彼等の「得意」とす

る「母としての学生運動」と「自主講座運動」が中心である。我々は、既に前章を明らかにしたごとく、個別斗争を斗争の中における、大衆の階級形成の回廊を説明した。

二二二においては、彼等共学同の主体形成が、資本主義・聖者主義的のものであるをバクワロクに組合主義・聖者主義の任務である。

彼等共学同、大学における学生内の内的矛盾を、資本主義の教育内容（一面的な知識技術）と学生内の向に求め、学生内は一方的に教育を愛容する「主体」として存在し、知的生産原素からの疎外から、現象形態であるとする。そして、このことの中、学生の起ち上る基礎を求め、その矛盾の止揚に向し、しなななり二二二においては、資本制大学における学生特有の矛盾の現象的把握もまた、このことななり「これを持つて学生を起ち上る根拠とする」とはななり「二二二の矛盾がある。すなわち、何故現在学生斗争が激し永続化しているのな」といった根拠を見出し二二二出来ないのである。

しなななり二二二においては、60年代後半の日本の対外関係にもついた社会的再編の一環としてある大学の帝国主義的再編にあり、これとの対決を通じて、我々の矛盾の止揚の方向性が与えられるのである。共学同諸君は、このことに無知であるが故に、一般的に大学内に存する矛盾の認識に学生の起ち上る基礎を設けなすまうのである。それ故、彼等は、出発点的に個別的・階級的闘いとしてある学生斗争に個別的・階級的枠をばめ、その個別的枠を越える内的条件の発現を積極的に行き出さないのである。

いよいよ「学生運動のエネルギーの発生根拠とは、大学内部に蓄積された資本主義的矛盾である」ならこのエネルギーは「諸関係の総体」たる大学の変革のものの中に収められ、その方向性を見出しなすはならない。これこそ帝国主義者の典型である。我々は、学生斗争の根拠そのものは、内的には、大学内部の矛盾に存するとしても、その内包している矛盾を拡大させ、これを自己否定的にならす場は、また、学生斗争が存するに於ける諸条件（社会的分業）を止揚するに於いて、しなななり、現在の

すなわち、一般にブルジョア社会における大学とは、資本制社会の発展を要求する知識の技術者の訓練を教育の社会的組織化によつてなすこととするものであり、「将来における労働力高給」に知識・技術を付与することによつて、労働力再生産構造の役割を担うものである。下部構造の地点なら見るならば、資本家階級が社会的分業を発展させ、より高度な生産性を獲得する技術的労働者の生産の場としてあるといえる。そして、二二二においては、将来における私的商売所有者としての存在は、将来的には「如何に高く労働力を賦感するのな」という意識した生み出し得ない。ところが、大学における労働力高給への意識は、知識・教育にあり、しなななり、この知識・教育は、宗教・芸術のようには、観念にのみ自主的形態を有し、彼はななる知識・教育を自然発生的にばあるは、人間解放への参予として手現化するものである。（誤解のないように言つたらば、あくまでもこれは現象としてのそれであり、資本制生産様式においては、知識・技術を資本、資本の下に包摂されなすまうことは自明である。すなわち、ななる学生内の矛盾の激化が学生斗争と

資本制生産様式の発展をゆびして闘つている。しかし、タリ予階級との統一戦線の一環として展開されればならず、むしろ、ななる闘いの場を、大学の矛盾の変革としてそれ自体、個別的・階級的存在の中に包含し、また、全人民的政治斗争のうちに、更には国家権力打倒斗争の中に形成されればならない。すなわち、学生大衆の主体形成は階級意識の形成は、大学内部における「諸関係」の中に求めるべきではなく、また、「諸関係の総体」たる「国家」の内に求められるのである。なぜならば、大学を管轄する民社等は、その総括を国家のうちに包含してあるのであり、従つて、大学をも越える目的意識性はこの斗争をゆびして現象化するものである。それ故、彼等共学同は「自主講座」を行ひ、「階級の知的生産全体に対する批判」を通じて「新たな労働能力」と「政治意志」を獲得したとしても、それは、せいぜい「高級技術労働者」のそれとしない。階級的・政治的団結はなすべからぬのである。227の事態を示したものは、この「自主講座」による主体形成の破産であることを再度認識すべきである。

共学同諸君ノ

いくら「理論戦線」を読んゞ、手取れない主体形成
証を持ち出さうとも、君たちのサンディカリストと
しての体質ならしめ、それは組合主義的なものでし
ぬないのだから、階級形成証は我々にきかして、君
たちは、ヨーロッパあたりの徳体の知れない新刊書
を輸入して、自主講座をも行っていたまえ。

情勢任務方針

目次

1 帝国主義の危機の進行と国際階級闘争の性格

2 帝国主義列強の権力再編

- (1) 基軸米帝の世界戦略の転換
- (2) 没落英帝、脅威仏帝の危機
- (3) 勃興西独帝の侵略反革命抑圧とその限界

3 後進国階級闘争の高揚

4 「労働者国家」の動揺と分解

5 日帝の危機と権力再編

- (1) 日帝の危機脱出と攻撃の方向
- (2) 佐藤帝国主義政府のなし崩しファシズム化への突進

6 安保粉砕から日帝打倒へ

- (1) 七〇年安保闘争の基本的性格と我々の任ム
- (2) 闘いの方向性

第一章 帝国主義の危機の進行と国際階級闘争の性格

第二次大戦後、二十数年を経た今日、世界史に大転換を画す段階にさしかかった。六七年の一〇・八闘争が切り開いた階級闘争の商場は先行して斗われてきた後進国武装闘争の質を先進国主義心職部における斗いへと飛躍させつつ、進行する帝国主義の危機のなかで、六九年NATO、七〇年日米安保粉砕、そして七〇年代ア独樹立の斗いへと飛躍せしめる情勢をつくりあげている。

ウエトナム解放闘争の軍事勝利の前進と政治的コウ着状況、フランス五月の革命的商場から挫折に続く派動、西独非軍事化粉砕闘争と挫折に続く停戦、イタリヤにおける新たな商場、アメリカ暴入暴動の連続的暴発、白人反戦闘争の高揚と局面転換、中ソ論争から中ロ文革の激揚と国際一国内路線をめぐる途途、キューバ労働者人衆の決起とトルシヤ軍事侵入に続く革命と反革命の特種的派動、そしてかつて国際階級闘争の転換点に立って突出した日本の労働闘争が切り開いた権力との階級攻防関係、すべてこれらは七〇年代へと向かう商場のつくりと派動と闘いの質であり、押し進む闘いの一面面をすぎない。

以上のような国際階級情勢にみまえば、我々は現代帝国主義の危機の性格と形態とその展開とを把握し、ここから規定される政治権力の階級闘争の性格、及び政治危機から内乱に至る階級闘争への展開の展望を洞察しておかななくてはならない。

現代帝国主義の危機は過渡期世界の矛盾に現れ、これら不均等発展の三原則の同質平等化と諸列強権力志向不均等発展の三原則の同質平等化と諸列強権力の意志的相互協調政策が統一市場内に各国の危機を緊密化し、系統的鋭角的発現形態を保持し、この緊密化して未統的危機を外在化する勃興帝国主義の反革命軍事侵略の強化と、不均等発展の溝の中に救済されながらも没落する帝国主義の侵略と反革命の破壊として帝国主義各国を襲う。従って諸列強のブルジョアジーと政治権力は統一市場の争奪を招く全面的的展開を先取りして市場圏拡大にのりだし軍事外交を展開、国内権力の勢力増強を軸にブルジョア階級統治体制及び各諸の統制的支配の強化を統一市場分断以前に強行し、侵略抑圧反革命に抵抗するブルジョアジーに押し進めし先行的封鎖的階級攻撃を加え、連統的政治危機を形成する。この根底的な基本務能に先行的対策を迫り、帝国主義の海外市場圏を破壊し、独占資本の再生を打倒する前途を確保させつつ遂に諸列強

向対立を促進する後進国革命は、国際的性格をもち、この国際階級矛盾の激化に外から規制され、国内社会革命なる政治革命への危境を深め激化させる。労働者団結に及び群衆の階級斗争、この斗争を通じて、国際階級斗争を追求する根拠地国家の帝国主義に対決する闘い。これが現代帝国主義の根底的危境を形成し促進する要因である。

ではこれらの危境の進展とこれに對する兵力の動向は現代過渡期世界の階級斗争の運動性格をどのよりに発現させてゆくのであろうか。

世界統一市場防衛の枠に封じこめられて緊密化した危境は諸列強の階級基盤を襲い斗争の大衆的自然発生の爆発を連続的に創り出している。一九六五年以降、勃興帝国主義が列強向覇権斗争を通じての武器とし、かつ没落帝国主義を革命から防衛する機能を果たすことと性格をたててきたところの反革命同盟も統一市場を基として成立し得る軍事同盟である。

従って統一市場を分断されず保持される限り列強向斗争は帝国主義斗争へと発現させることなできず、侵略と反革命を統一しされない中で矛盾を累積しながら危境を深めざるを得ないのがある。ここに大衆的自然発生の暴発を統一市場分断以前から

も、として侵略反革命の開始以前の段階から連綿と

(2) 世界市場の分断と統一市場の形成

統一市場分断以前に、その動搖を恐怖の均衡で防衛しながら、反革命戦争をプロトダムで遂行して軍事的敗北をため、西独の核防拒否、チエコの激動、フランス五月革命に直面、マルク切り下げとフランス切り下げを拒否され、日帝から津浦返還を要求され、韓国から反革命政争を要求される中で辞任したジョンソンに代って登場したニクソン政権の性格とはいかなるものか。

侵略と反革命を統一しうる唯一の帝国主義、そして、統一世界市場の防衛を担いえる唯一の基軸独占資本主義帝国は、世界反革命軍事戦略と経済戦略の全面転換を迫られている。

この転換の仕ムこそ、ニクソン政権の性格を決定づけるものである。米帝は統一世界市場防衛を絶対的前提として世界總資本の利益を代表する基軸国の責任から自国の経済利益を追求してきた従来の立場を半ば放棄し、米帝の経済防衛と利害を前提として、統一世界市場防衛とヨーロッパ及びアジアの反革命を西独日帝に要する。従って自国は均衡予算の下に経済拡大政策をおさえて統制的強化を口かり、保

つ断に発狂させ、かつその闘いの性格を侵略反革命同盟に引きつける闘いと曰ふ兵力の抑圧に對決する闘いを結合させてつづつ爆発させるのである。

現代過渡期世界にみける反革命斗争と抑圧に對決する大衆斗争がプロレタリアートと諸階級を巻き込んで反革命斗争へ、更に自由帝国主義と打倒斗争へと連綿的に転化発展し得る現代の階級の内面は以上の如き規定されたものである。

第二章 帝国主義列強の兵力再編

帝国主義列強の政治兵力は、経済的軍事的世界戦略の大転換と軌を一にして、その兵力性格を改めようさせつつある。

① 勃興帝国主義においては市場圏拡大に全面的に乗り出し、帝国主義軍隊の強化と軍事外交、海外派兵と反革命同盟内のハネモニー争いを展開し、② 国家兵力の暴力枠を軸にスルジョア制を強化しつつ、③ 帝国主義国家兵力の集中強化に照応して、経済の統制強化を統一市場分断以前に遂行、④ そこから、侵略、反革命の外圧と国家支配の内圧抑圧に對抗するプロレタリアートに政治先行的攻囲を加え階級決戦に備えようとしている。

予算の拡大と自衛隊のアジア反革命任務、韓国防衛に備えうる拡大強化とを要求してこよう。

米帝は相対的停滞期に移行したとはいえず、いまだ最強の帝国主義であり、三〇年代の如くニューディールを準備するものではない。現在のアメリカ独占資本は、内部から過剰生産恐慌をまきおこして統一世界市場を分断させる位置ではないが、ヨーロッパおよび日本の政治危境と内乱が統一世界市場の分断をまきおこせば、世界的規模でおそく革命の波に對峙して、日露反革命の指令部たらざるを得ないし、黒人暴動を内包する現段階では再び国内階級危境を一日的に暴約することは不可能である。したがってニクソン政権の客観的位置は、国内的には大統領権の強化と国会の無力化を追求し、投資規制、資金抑制でその抑圧を強化せざるを得ない。今般化する国民の意志を対し核均等共済と対中回反革命に結集させ、高税を莫大な国家予算に集中、軍事予算操作をつづけ、国民の不満を中回と黒人に向けさせた。危境の到来が迫れば追々ほど国家兵力は白人中間層の絶望と構しみを黒人植民へむけ、要人の革命的爆発を粉砕して国内階級を崩壊せんとするるのである。

以上のことを要約すればニクソン政権の、エリク

メの独占利益の主張—保護主義—西歐、日本への至
政治的時勢を返し、中東のセカンド世界、ベトナム
から中東東洋における軍事時勢を返し、核独占、飛
躍要求、国内で内閣部—大衆などの結合を基に、し
た反動と暴力の強化への路線の転換ということであ
る。そのい、た状況下における革命時勢の斗いは、
SNC、SDS、フランスのパマーの反戦斗争を契
機とした連帯の下、米軍打倒、安保—NATO粉
砕、ベトナム革命勝利の方向に転換しつつある。

【英特務情報、魯満公評の危境】
不平等条約の鉄の法則に最も多くおそわれ、諸
列強の均等政策も心なしく、二度のポンドカ
リ下げで国際通貨の位置から転落しつつ生存条件を
削っている英特の危境は深刻である。高級調和の労
働党ウィルソン政権は国内階級闘争を強行して危境
脱出をはかる準備もなく、中東以東のテロテロ復讐起
点と三連のひきおげで復讐反革命を縮少、国内階級
危境を激化させてつづき前進にある。英特が危境を
脱出するためには世界政策の放棄、プロック化を断
行する以外にないのであるが、そのためには若年
主父権力が国内人民を排外主義に誘導し、後進国武装
解放斗争を武力で鎮圧しプロック化を軍事的に保持
し、それにはならない。これはファシズム政権によ

【西欧の設置資格不平等の大統領権限】
西欧の設置資格不平等の大統領権限が与えら
れている。したがって、反革命中東とプロック化の
下に結集し革命に対抗する。プロレタリアートに
された途は敵軍での集約ではなく、巨大なマッセン
ストと市街戦による決着であり、大統領に結集する
反革命軍との決着であり、更に軍が革命的ルッポの
中で解体すれば西欧反革命内閣軍との階級戦争であ
る。

アルジェリア、ヴェトナムに対するフランスの帝
国主義侵略戦争はフランスの敗北に終り国内政治危
境を露現させたが、EJC結成とその域内市場に支
えられて再起した。

再起したフランスは再び相対的後退を続ける
アメリカ帝国主義に対抗し、大コロコロバ権限のイ
デオロギーの基に全コロコロバを吸収せんとしたけ
れども、その結果は、その意において重工業工
業化を、国際的同意を達成し、とていえ、諸
権限は全く弱体化であり、その権限が下部権限の上
に属するにすぎず、その権限が弱体化するのには
然である。特に重工業における国際競争力の弱
さを、アメリカ帝国主義の急激な発展の前におされな
が、アメリカ帝国主義とヒューリス帝国主義の後退

て始り、その可能となるものがある。現在中東は英特
危境を露現するに過ぎず、それによって国内階級闘争を
めぐるであろう。

脆弱な憲法制度の基礎を西欧、米帝国主義の侵略
侵襲に揺るがされ、その弱さの強化は国内階級の善化
を跳躍台として展開した東欧中東への帝国主義軍
事外交を五月革命を粉砕され、その準備としての
フランス危境と不平等の階級激化に導き、その準備として
対決し、崩壊の途程に立たされながら、待たせき切
り札もなく、没落中産階級ファシズムの登場条件を持て
ぬが故にドコロル新政府の権力性格とはいかなる
ものであるか。

フランスドコロル新政府は、ドコロル政体のドコロ
ル中東を吸収している。五月革命の激発も、
「オ五共和制打倒」ドコロル支持が、大衆的争
点となった。小中東とドコロルと旧軍人の反
革命テロもドコロル支持を叫び、決してドコロ
ルに代るカリスマを待望し、オ五共和制に代るナチス
ム、ドコロル型ファシズムを大衆的に登場させな
か。それは何故か。畢竟は簡単である。大統領権限
のオ五共和制自体が前ファシズム政体だからである
オ五共和制は一九五八年フランスの危境を救済する

【西欧の設置資格不平等の大統領権限】
西欧の設置資格不平等の大統領権限が与えら
れている。したがって、反革命中東とプロック化の
下に結集し革命に対抗する。プロレタリアートに
された途は敵軍での集約ではなく、巨大なマッセン
ストと市街戦による決着であり、大統領に結集する
反革命軍との決着であり、更に軍が革命的ルッポの
中で解体すれば西欧反革命内閣軍との階級戦争であ
る。

アルジェリア、ヴェトナムに対するフランスの帝
国主義侵略戦争はフランスの敗北に終り国内政治危
境を露現させたが、EJC結成とその域内市場に支
えられて再起した。

再起したフランスは再び相対的後退を続ける
アメリカ帝国主義に対抗し、大コロコロバ権限のイ
デオロギーの基に全コロコロバを吸収せんとしたけ
れども、その結果は、その意において重工業工
業化を、国際的同意を達成し、とていえ、諸
権限は全く弱体化であり、その権限が弱体化するのには
然である。特に重工業における国際競争力の弱
さを、アメリカ帝国主義の急激な発展の前におされな
が、アメリカ帝国主義とヒューリス帝国主義の後退

なしにして、プロレタリア体制の確立に方向を定め、後進
主義と一体の発展の途程を謀ることを図ることである。
第三に反帝統一戦線を主要対象に反動と暴力の根
拠を排除を容れなく進歩することである。

ともあれ、陛下帝国主義政府は七〇年代の日帝の
根本的矛盾を本格的に解決すべく突進を開始して
のである。

我々がそのだし出ししてプロレタリア化を打ち破り得た
ならば、プロレタリア主義、人民戦線主義、世界革命プロ
レタリアの巨大な三つの人民の命脈と世界革命戦争の未
済の實現の時代に突入するであろう。

第六章 安保粉砕から日帝打倒へ

(一) 七〇年安保斗争の基本的性格と

我々の任務

① プロレタリア主義への永続的攻防

七〇年安保斗争の性格

七〇年代、世界史上三度目の市場分割戦は、労働
者国家、後進国武装解放斗争に規定され、国内危機
に對する国内反革命抑圧と国際反革命軍事膨張の主
導権確立として問題が提出されているのである。

日本帝国主義は現在の自らの運動に對外侵略反革
命と国内抑圧を如何にして統合し、永続的なアジア
侵略反革命を全面化し得るか否かの試練に立せられ
ており、まさにこれを自衛隊の帝国主義軍隊化をテ
コに海外派兵をもつて推進してゆくことと方向されて
いるのである。

かかる中において斗かわれるプロレタリア主義はプロ
レタリアへの永続的攻防に七〇年安保斗争の基本的性
格を、我々を先ず六〇年安保斗争との比較において
確定していき。

先ず第一に六〇年安保斗争と根本的に相違してい
る点は、六〇年安保においては未だ日帝の対外膨張

は全面化しては、侵略と反革命の直接的統一が日
帝にとって死語の課題となつたといふことであ
る。その限りにありて六〇年安保は米帝の国際侵略
反革命政策に受動的であり、日帝の対外膨張と国内
危機には統合したく、斗争自体も日米関係の修正
に中立を掲げた反米小市民的運動が全面化せざるを
得なかつた。しかしながら七〇年安保は明確に、国
際的にも国内的にも日帝の侵略と反革命の統一を追
つていさの志である。

オレに、六〇年安保は日本帝国主義の成長期に位
置し、国内至極危機は全階級全階級的に露化し得ず
局部的な斜陽産業部内での合理化にとどまらねば
好して、七〇年安保は七〇年代の至極危機は中小
企業、農林、官公労が互に互に互に互に互に互に互に
つつある。これはIMF体制もたらずに、米帝に對する
の、市場分割戦の激化、米帝に對する
資本自由化の二段階に到達するに至り、大資本
併合、合理化、資金力、上等民間基幹物産ももたれ
て臨む必要ざるを得ない政策が必然化しつつある。

そして以上のことは、日帝にとりて或いは
人民にとりて一切の中間的解決はあり得ず、日帝に

いかなる方針なる攻撃は我同盟運動を崩壊させ
つつも、革命の左派の運動の抬頭と組合主義左派
活動家を左翼的に変質させ大規模な左右への分断を
併発せざるを得ない。

オーストリア、反軍統一戦線に對して反動と暴力の抑防
体制を整えることである。

佐藤第四主と政府は七〇年次の日帝の根本的矛盾
を六九七〇年に共行的に解決すべくすでに攻撃を
開始した。もし我々がかかるなし論しフアリズム化
を粉砕し得ないならば、日帝は侵略反革命戦争へと
国内反革命を一体的連綿的に遂行していくであろう。
もう論議的危険は残存するが、たが我々と四際
プロレタリアートがなかなかなし論しフアリズム化を
粉砕し得たなら、フアリズム系人民戦線系プロ
細派の巨大な分断と世界革命戦争の永続的實現の時
代を迎えるであろう。

② 七〇年安保と沖繩

我々は七〇年斗争一日帝打倒斗争を一日的意味と
してではなく、永続的な反革命戦争の始まりを同時
的に打倒していく「NATO」安保粉砕・ハトナム
革命勝利の世界革命運動の前衛として斗いぬくの
をなくしてはならない。我々は七〇年安保粉砕を

争の国際的位置を確定するものこそ「沖繩問題」で
ある。

七〇年安保は日帝と米帝との共同利害關係を画し
て、六〇年安保の除外対象たる沖繩を共同軍事領
域に引きこむことによる自衛隊の沖繩派兵と「ジ
ン」派兵に自っていくものとしてある。そしてこのよう
な米帝との共同利害關係を画しての後進人民の武
力抑圧を媒介とする対外侵略への布石としての「沖繩返
還」に他ならない。すでに佐藤第四主と政府は「沖繩返
還」を今年自衛隊の沖繩派兵を確定している。
日帝は一年年の日米松口において、沖繩問題の論
議をさして日米關係の友好化は保ち難い」と提議
し、「施政権と基地の分離返還」を米帝に要求した
。しかし現実的に沖繩が米帝の「ジ」戦略に占める
位置はより分離返還は拒否されたのである。そこ
にありても下田兼吉に見られる様に「核付き自由使
用」現状維持による沖繩返還を追求しているの
である。この事は、日帝が現在の在沖繩米軍基地に對
しても自衛隊駐留を保障とする返還をゆだねたとい
うことである。それは「本土並み」基地の存在では
なく、「自由使用」核持ち込みの必然性を承認
するということである。こうして「核付き」を、日米
安保条約を再改訂することなく、「沖繩返還」を保

し、そのことにより、米帝の「沖繩問題」は、米帝の
行動の根拠とするのである。これにより、日帝はそ
の防衛領域を朝鮮半島、台湾海峡にまで拡大する根
拠を与えられ、それは史實的な海外軍事膨張であり
「ジ」侵略反革命戦争の前段階である。そして又一
方、「沖繩返還」による「核使用」は日本
全土にわたる「核持ち込み」の一大既成事実であり
、まさに自衛隊の核武装の實現として存在するので
ある。

従って沖繩問題の核心とは、米帝は、沖繩が戦後
二〇余年の向米帝の世界戦略の一環として、就中「ジ」
の侵略のキープポイントとして軍事基地としての役
割を果たしてきたという点とあり、米帝は、日帝が
今まさに自らの「ジ」侵略前線基地として「沖繩返
還」をなそうとらんとしている点とある。

以上のことをふまえるならば、沖繩斗争とはがた
る米帝の世界戦略を如何に粉砕するのなという問題
として提議されているのであり、即ちそれは「入り
力人民の斗いと結合した六九年NATO解体」七〇
年安保粉砕から日米両帝の同時打倒に展望をあ
くものななくはならない。軍マル系、無敵派の「
入り力人民の斗いと結合した六九年NATO解体」

でもない。我々は、世界に一回の革命の下、七
〇年安保粉砕、日、西帝の同時打倒を目指さ
るのと同じく、日帝の侵略前線基地化阻止
戦略的課題として、日米人民を中心とした「ジ」
人民の団結の下沖繩斗争勝利を目指さなくてはなら
ない。その中心において我々は本土に於ける自衛隊の
核的課題として「沖繩」日帝の侵略前線基地化阻止
し、日米人民の自衛隊の同時打倒の斗いと結合する
形において沖繩現地に於ける「米軍基地撤去」「米
軍政打倒」の斗いを位置付けなくてはならない。そ
して以上の三大スローガンの實現は、世界に一回の
時革命戦争の革命的・現時的課題としての日帝打倒
、米帝打倒の運動過程で實現されるであろう。

以上のような米帝の反革命世界戦略と日帝の沖繩
侵略前線基地化を媒介とした海外侵略への主体的対
決を沖繩人民の斗いと結合させるという闘争を一切
欠落させたが故の「祖國無条件復帰」中核派の「
沖繩返還」軍マル系の「沖繩人民解放」等は「夜
米ナショナリズム」或いは「空想社会主義」的「口蓋
命」への転落として結果せざるを得ない。我々は決
て軍マル系、中核派の沖繩斗争論に批判を加えてあ

なからこれは、神龍人民の米帝の抑圧に對する即時
的表現である。本土復讐、意識を固定化しその延長
線上に安保粉砕、日帝打仆を位置付けるという大衆
の自然な本性への非難であり、階級形成論、戦略論
を閃かした。民族ナショナリズムにはすぎないので
ある。神龍人民の即時的反動、本土復讐、意識の中に存
在している。米軍政打仆、米軍基地撤去への萌芽を
米軍政、基地の本質的性質をバク口する中から不断
に米帝打仆へと高めていく階級形成論の閃光こそ中
核の「神龍斗争論」である。

スローガン

★世界一同時革命の下、七〇年代安保粉砕

日米兩帝民主同時打仆をめざそう

Ⅰ神龍日帝の侵略前線基地阻止

Ⅱ米軍基地撤去

Ⅲ米軍政打仆

日帝撤去

統合労働布令粉砕

(三) 斗いの方向性

すでに確認してきたように、日帝をめぐる国際的
国内情勢はブルジョアジーをしてアジアド侵略反革命
戦争へと国内反革命抑圧に崩し、ファシズム化の
連続的、一挙的展開を必然化させている。佐藤帝民主
義政府はなし崩しアジアド派兵、強権支配、統制、
への秘行を、右翼、自衛隊、アジアド反革命政権の正
力を受けつつ、アスバック、三防、破防、自衛
隊の治安、台併、台理化、所得政策、等を基に
一挙的に推進せんとしている。しかしながらこのよ
うな政策は必然的に帝民主義労働運動、民社、同盟
、JCIの活動を開始させ、来るべき恐慌、危機、
侵略反革命戦争の中を、聖路斗争、反戦斗争の激発を
もたらさざるを得ないだろう。我々は日帝の軍事外
交路線、聖路政策の全面的政治バク口と佐藤帝民主
義政府の階級性格総体を明らかにする中から、そ
れを打仆する戦略戦術をめぐって、フランス派、人
民戦線派と徹底的な党派斗争を展開し、新たな全人
民的団結の首を形成しなくてはならない。

全人民的斗争の環としての軍事外交防戦争にお
いて、我々は日米兩帝斗争に終始することを徹底し
て拒否しななければならない。即ち、我々は、

敵権力のアジアド侵略反革命戦争実現のための自主
防衛路線を側面から援助するという犯罪的な役割を
果たすのにはすぎない。まさに開始されているのは日
帝の死活をかけた勢力圏形成、対米膨張のアジアド侵
略反革命戦争への道であり、断じて受動的な米帝戦
略への魚鱗ではない。

以上の点をふまえた上で現在の佐藤帝民主義政
府のなし崩しファシズム化粉砕を、世界一同時反帝
統一戦線、世界赤軍の建設を媒介に世界一
同時革命、世界革命戦争、ソビエト運動へと連
続的に発展させる我々の戦略を、現在の政治過程
との関連においてより一尺具体化してゆく作業に入
ろう。

我々は七〇年代安保斗争、七〇年代階級斗争に對す
る我々の方針を、仏五月革命の教訓を受け継ぎつつ
日帝斗争と聖路斗争の統合、日帝民主義反戦斗争
と反帝統一戦線として設定する。以下順を追って考
えてゆこう。

日帝斗争と聖路斗争の統合、フランスメント
仏五月革命において、五五〇内部に於ける階級
との衝突、階級闘争の激発し、佐藤帝の聖路政策と階級闘争

し、市民、スターリン主義に包摂され、佐藤帝、労働
者、の聖路斗争、セネストは革命的左翼の全人民的
政治斗争を媒介としてその性格を一変し、兵隊から
街頭へ、セネストから地獄、スト、街頭、リカード、
へと発展した。帝民主義の侵略反革命戦争と階級闘
争の危険の進行、聖路斗争と反戦斗争の高揚の中を
我々は聖路斗争と反戦斗争を結合させつつ、基幹者、
プロレタリアートの中へ我々のハゲモノ、を拡大、
ていかなくはならない。先進市場分断、資本
自由化と対米ダンピング輸出向けへの台同合併、
神占の強化が、現在のロープにおいて、民間、基幹者、
で聖路斗争を激化させつつも、これを開放し、民社、
同盟、JCIの帝民主義労働運動の下に集約され、他
方において対外戦争、戦争を存任しない公防戦を軸に反
戦斗争が高揚し、革命的左翼の下に引き寄せられつつ
あるという事態を我々ははっきりとみておかななくては
ならない。

我々が目指すのは、聖路斗争を国内的には金融、
頭、支配、国際的には世界分割に帰結する帝民主
義、帝民主義的、社会的、再編、再編、再編、再編、再編、
意識することであり、それを帝民主義国家権力との

至人民政治斗争—反戦斗争を媒介として、プロレタリアートを反戦斗争へ組織し街頭化させる中で至清斗争と反戦斗争の結合—反帝斗争として展開することである。そしてこの斗争は術をマツヒンストラキ、街頭バリケード戦として設定するのである。民口によるゼネストというものがブルジョアジーの力再編に對する「現体制防衛のストライキでしかない」の如し、我々はませロマッセンストライキとして「ブルジョアジーの暴力に抗するト社民のゼネストからひきちぎった」プロレタリア革命の力、の攻撃的なストライキを革命的左翼のヘゲモニーの下に地域における街頭バリケード戦を以て扱くことを指向しなければならぬ。そのことによつて、この地区反戦青年委員会を軸に基幹産業プロレタリア内部へのハゲモニー拡大—生産点の掌握を勝るとである。

II 革命的な反戦斗争の推進

革命的な反戦斗争とは、反戦斗争を単なる反政府斗争として組織するのではなく、反帝斗争として、日打打—プロレタリアをめぐりて、権力斗争として展開することである。我々はすでに、来るべき日帝の侵略反戦斗争と恐怖とが単なる政府危惧ではなく、設公制、民主主義のファシズムへの支配形態の転換をもた

として位置付けておかななくてはならない。そして同様にこの国際的戦線を、我々の手いを突破口として、世界に一回同時革命—世界革命斗争へと転化しなければならぬ。

最後に、帝国内に軍隊解体—至人民の武装—赤軍の建設を勝ちとらねばならない。革命的な反戦斗争の再編を政治工作を媒介として、自衛隊の分解—導くこと、赤軍の中心を独自に形成することの統一の中、至人民の武装、赤軍の建設を自指とする。

以上の二つに我々は七〇年に向けて革命的な反戦斗争の性格と形態を、自衛隊解体と安保解体の結合として、具体的に政策を対し、国家権力、社会的諸機関の占拠—解体—管理の結合として、確地と共闘戦、地域斗争と中央権力斗争の結合としてあることを確認しなければならぬ。従つて当面の斗争は術は基地撤去斗争と防衛攻撃斗争である。そして我々の闘争は、六〇年安保斗争が教訓をめぐつての政策阻止斗争に終始し、その政策の具体的な基の解体と離れ、又かある権力機関と社会的秩序の解体斗争の形態を指導性を注出し得なかつたことを明確に概括し、基地巡りと反米宣伝の日共談話、路線、中核策の日帝の侵略反革命の観点を欠落させ、中央権力斗争なき地域—個別斗争に對し

らすことを確認して来た。そこにおける階級的危惧を革命的な危惧に転化すべく、我々は反戦斗争のキ一の攻撃的危惧として明確に日帝の「アジア侵略反革命斗争を設定しなくてはならない。七〇年安保—国際反革命同盟強化の内実としてある自衛隊の中心主義、隊化、沖縄前線基地化への斗いとして、アジア侵略外交、沖縄核行き返置、核武装、海外派兵、兵器の生産、自衛隊の募兵等の自衛隊の中心主義、軍隊化の体系のバックとこの戦略的解体めざして確地戦と中央権力機関への攻撃を不断に組織しなければならぬ。

しかし日帝の侵略反革命の道が現実的には日米反革命共同軍事行動を通じて自衛隊の「アジア派兵」としてあるが故に、自衛隊解体の斗いは当面の「バトナム侵略反革命共同行動から極東への拡大に對しての」一歩の行動の体系を解体せしめつつ、その兵器の生産、輸送拒否、基地撤去、エンブラザー等、核特等々等々中央権力斗争を展開する必要がある。この安保解体の斗いは「国際反革命同盟—中心主義の侵略反革命斗争に對する中心主義—プロレタリアートの斗い」—後進人民の武装解放斗争—労働者国家—という戦線における「安保—NAPO新軍、バトナム革命勝利」の国際共同斗争における日本反戦斗争の任務

でも批判を加えておかななくてはならない。

III 反帝統一戦線をソビエトへ

我々は現代過渡期世界における革命の組織的戦線を、反帝統一戦線をソビエトへ、として設定しなければならぬ。我々は世界に一回同時的—反帝統一戦線を提唱する。これは国際的—反帝統一戦線をもち、世界赤軍編成—世界革命斗争を以て抜き世界—口油への一環として、南口主義—口油において、反帝統一戦線をソビエトへ、を要するものである。

統一戦線戦術とは党形成—階級形成—党斗争の他党派解体—の結合であり、危惧の時代の中心主義のファシズムとしての登場に對し、その社会政策を柱とするソビエト、ルンペン口をプロレタリアートの側に結集することである。

斗—に我々は統一戦線戦術を媒介に、革命的な反戦斗争、反戦斗争と至清斗争の結合を推進し、ついで基幹産業プロレタリアートの中に我々のハゲモニーを拡大していかねばならぬ。これは党形成の問題である。革命の不可欠の指ドカ—ハゲモニーとしての党の革命に至る階級斗争の同時的展開過程と外在的に創出され得ない、危惧への接近は定期の代表的改良政策の危惧を促進し、それは自然発生的に改良されるべき反革命階級の拡大をもたらすのであり、

かかる過程で党の形成とその下への战斗的入隊の結
集を自ら何れ田的に行うのとはかく、兵力との斗争
の战略的前進を追求しなければならぬ。現在のな
反戦斗争の高揚と変化、そして来るべき日帝の侵略
反革命戦争と恐慌をもたらす政治危機、至濟危機の
中の社会排外主義の解体を不可避としていることを
予見しつつ、この社会排外主義、社民の解体をマ
ニスムにゆせざるのとはなく、地区反戦→市場反戦
への急転を踏合しつつ青年同盟の結成として我々が
奮闘しなくてはならぬ。

オニに反戦斗争へ他党派解体への戦術として統一
戦線を提議しなければならぬ。当面の対象は危村
が顕在化している社会党である。共産党の解体は
世界統一戦線→世界赤軍を媒介に労働者回
家の世界革命根拠地への事化を追求する中で始めて
可能なのであり、現在的には統一戦線の対象として
は不可成である。また社会排外主義として固定化し
つつある民社党については早急べき政治提議、至濟
危機の現象化の時点を待たなければならぬ。至濟
一才我々は反戦青年委員会に介入し、地区反戦を
組織し、公労協→ロレタリヤ→下の中心へハモニー
を拡大していくと同時に、一〇、八、火の反戦斗争の
爆発的高揚をきりひらいてきた三派全労連の再建を

統一戦線であり、兵力奪取→農村→兵力村固を→ロレ
タリヤ→下の中心へハモニーの下に相成する結核階級反
の战略的同盟として実現することを目標とするのであ
る。それは日帝回主→回における武裝コミューン→セ
工下の實現に備蓄する。→ロレタリヤ→人民が世界的
なる口進を實現する力量が支配階級を危村における
統治能力破綻の状況においつめ、かつその矛盾を政
府打倒に集中し得る事実上の新たな兵力は具体的定
型をもたねばならぬ。かつ最近過程においてそ
れは目的意識的に進まされねばならぬのである。
来るべき日帝の侵略反革命戦争と恐慌が生み出す危
村の中で社会党、民社党が解体し、この統一戦線が
ソビエトへと発展し前日主のマニスムとの間に
三重能力状態を形成するのである。そしてこの新しい
の進展は必然的に世界革命戦争を切り開き世界統一
世界統一戦線→世界赤軍の中に労働者回主→ロレタ
リヤ→下が引き入れられ共産党の解体も結果として
あろう。従って我々は「安保粉砕、目前打倒、日本
共産主義者協同会」→全国地区反戦連合→全労連
という日本における反帝統一戦線を世界的な反帝統一
戦線の一環として位置づけていくのである。次に
我々口中核派の、社民との革命的統一戦線、に對し
て批判を加えておく必要がある。中核派は来るべき

目標を力めてはならぬ。三派全労連解体の基本的
要因は、10、8、火の新しいの前進が战略的斗争を全面
化する中で諸党派が、覺醒斗争を保障しつつ、この
統一戦線に結集する大衆の階級形成を押し進め得た
から、たことに起因する。それ口自然發生的な大衆組
織次元において行われたいことには根拠をもつ。
従って我々は、かかる統一戦線の中を覺醒斗争と階
級斗争を保障すべき革命的左翼階級回の協定→覺醒
向統一戦線の形成を提議しなくてはならぬ。我々
はすでに4、8、沖繩斗争における五派共同声明を現象
化した。それは11月佐下訪米阻止斗争に至る過程
において更に、「安保粉砕日帝打倒、日本共産主義
者協同会」として勝ちとられべきであろう。

オニに階級形成の問題として統一戦線を提議しな
なくてはならぬ。具体的には、全労連の新しい統一
と全国反戦青年委員会の全国地区反戦連合による再
編を「安保粉砕日帝打倒日本共産主義者協同会」
の下に遂行することである。このことに基づいて革命
的→反戦斗争、反戦斗争と経済斗争の結合が軍事提議
→ロレタリヤ→下の中に物質化し、中核派が労働
→ロレタリヤ→下→マニスム→マニスムが階級形成を導くた
い力がはかることである。

反帝統一戦線→革命戦争が兵力奪取のためのとる

危村の性格を→ロレタリヤ→下が今まで通り→政治制
度主→マニスム支配していくことができなくなり、→ロレ
タリヤ→下が今まで通り→政治制度主→マニスム→社民
支配されることを望まなくならぬという革命的提議と
して明確に把握してはならない。それは政治的臨戦体制
化という感質的な兵力分析に留まらぬというが故に
民との統一戦線、社民解体の战略的意を把握でき
ず、この統一戦線を共産党、スターリン主義との対
抗→反スタ統一戦線へ至少化しているのである。そ
してそれは同時に→スターリン主義解体の方向性へ世
界統一世界反帝統一戦線→把握し得ずこれを二回
的に展望する誤りにも原因するのである。

最後に我々は反帝統一戦線の形成の問題として全
労連の統一と全共向全日評議会の結成について解村
ておかわねばならぬ。

世界一回反帝統一戦線の一環としてこの反戦→全労
連の反帝統一戦線としての形を形成していくために
は上からの政治向安保粉砕協同会の結成と同様に
全国地区反戦連合→全労連の結成を追求してい
かねばならぬ。我々はすでに先日の全労連臨時回
大会において、反帝統一戦線の一環としてこの全労連
のコミューン組織への政論をなした。それは
具体的に以下に回定期大会においてすべし。全労連の

統一再建をめざしつつ、戦後期に全労連を自治会、
斗争連盟の縮小体として改編したことがある。作
来の全労連においては自治会活動より大衆斗争を突
体的に領導していきのは各党派の大衆斗争機関総体
であるにもかかわらず、それが自治会執行部として
しか表現されたい限りを有していた。自治会連合で
ある限り形式的に「同盟」が中心問題となり支持層
集むり全労連を突体的に支えても役員を差しか
いといの矛盾が起きてくる。かかる実情を踏まえ
た上で、なおかつ全労連の四分断状態を止揚するた
めにも自治会内大衆斗争機関の全労連加盟を承認す
ることが向われていた。即ち全労連への自治会加盟
と共に斗争連盟加盟承認しその縮小体へと全労
連を改編することである。その上でいわゆる「反動
全労連」を反動労連や学生解放戦線との統一戦線と
し、更に「反戦会」連合した中核全労連や「学生
会」連合した草マル全労連とも統一行動を実現し
総体としての全労連運動の統一を実現していくので
ある。

これに対して草マル派は全労連を自治会の連合体
として抱えると同時に一つの政治態度に拍打された
大衆的斗争機関ともあつて全労連の三層性を確
え、その上で現在の分断化状況の止揚を統一行動の
の結成を急がねばならぬ。具体的には統一戦線、
統一行動、青年会の統一の系統的提議、統一救済の
設置として内部におけるネオロギイ斗争の保障を
実現しなくてはならないだろう。これは統一戦線時
術の別現時的適用であり、全労連の統一としても
全共闘単位での全労連加盟を実現し、全国地区反戦
連合との連関の下に明確に反動統一戦線の一環とし
て位置付けておかなければならぬ。そしてこの連
結形態は極民主義の侵略的民主革命に對する大衆
的斗争一マツでメソストライキをめぐり斗争形態
の中核、全人民的政治斗争の一環として他斗争及
組織に連なることを通じての再系統的発展をもつて
ソビエトを追求し得るであろう。

つみ重ねの中で行くという全くセウト主義の主張
を行っている。各々の全労連が単別として各政治党
派に拍打されているから、その政治態度での統一
戦線を追求せずに言葉だけで下位層の統一を此方の
は本末顛倒であり、自治会の各別を統一行動を専ら
し、自治会として捲えろと突、叩くことは「実体
」と「形式」を混同して重畳した形式論理でし
かない。党派全労連といふセウトの矢物としてしか
大衆斗争機関を位置付けられない草マルの思考方法
では、その統一行動の実現が全労連の組織的断絶の
止揚へ直結することは絶対あり得ない。何故かと
えば、そのどうなる思考の下での組織的統一とは他党
派の解体止揚が意味しないからである。そして「
」は革命論としては「口」独断「一」独断の思考であり
「口」独断「ソビエト」独断といひ我々の思考とは全く無
縁な代物である。我々は全労連問題の止揚は、すべ
この政治態度とその下にある「一」の大衆斗争機関の
縮小体へ統一戦線機関として全労連を位置付け直す
こと以外にないと考える。

我々は、労働陣政府、同盟会、全国地区反戦連
合、統一全労連の形成と同時に「下」からの統一戦線形
成として、この向の斗争斗争を実現的に止揚してまた
各大学全共闘の総連盟として全共闘を四層化

战略論ノ一ト

序

I 帝國主義の成立とレーニンの战略

II ロシア革命—過渡期世界への突入

△△ 過渡期社会の成立

△△ 過渡期世界—攻撃型階級斗争と帝國主義の趨向

III 世界一回同時革命

—世界統一戦線—世界赤軍—

今日、至ての左翼諸党派が帝國主義の危状についで、論陣を張つてゐる。例は米帝のベトナムにおける政治的、軍事的敗北、恒常化したドル・ポンド危機等は、そのなつこの素材となつてゐる。至世界的な階級斗争の現局面の特徴は、①ベトナムを頂点とする国際的な后進国、植民地被抑圧人民の武装解放斗争の永続化、②帝國主義の心臓部におけるプロレタリアート人民の斗ひが、ベトナム人民の斗ひに牽引された形で、国際的なベトナム反戦斗争として展開されたこと、市場分割戦の開始と、③国内反革命抑圧に對決し、NATO、安保粉砕から自己帝國主義打倒の展望の下での革命的な反戦斗争として展開されたこと、④チェコ事件に示される様に劣弱者が国内にも同時的に危機が成熟してゐる事である。従つて、これらを統一する世界革命戦略と世界党と世界赤軍の建設が既に現実的課題となつてゐるのだ。

我々は今や誰の眼にも明らかになりつゝある革命の現実性を、過去から現在までの危機、自然発生的

性格に昇降するのはなく、プロレタリアートの實踐によつて、それを物質化せんとする主体的立場を強化しつゝ、その現実性の現代世界における性格を指し示し、その必要を求めよう。例は、華共同華マ共の如き個別改進黨論者でさえも、七〇年安保斗争の戦略的位置を確定せんと苦悶してゐる時代に、我が同盟が現行革命の戦略を解明して行く事は、階級斗争にとつて少なからぬ利益となるのである。それは、こゝもなほさず、現代世界の総体として把握の上で、その運動法則を解明して行くことであり、主体的には帝國主義段階を止揚したものとしてみれば、レニンは帝國主義論と帝國主義の批判と世界革命戦略の革命論的再検討と、その現代的適用に他ならぬ。

I 帝國主義の成立と レニンの戦略

一八七三年に開始されたドイツ大不況は資本主義世界の發展に一大転換をもたらし、それは資本主義の最高の、そして最後の段階としての帝國主義の

成立であつた。独占が競争にとつてかわるといふ言葉に端的に示される。本主義の变化は、当然にもマルクス主義内部に、混濁と分歧を引き起した。何故なら、それはマルクスの生涯にはなかつたことであり、資本論の回述にもなかつたことであつたからである。いわゆるベルンシュタインとカウツキーの修正主義論争といふれも、資本論の史的、論理的、位置の客観的解明を放棄した地点において、①変化した現象の段階論的解明を及ぼさず、無媒介的に

前進をなして行つたことに求める。

論理を押し上げて、これに見合う形での階級斗争へ修正主義経済斗争と体制内改良の積み上げのベルンシュタインと、②変化した現象を資本論物神から一時的、偶然的として、恐慌とゼネスト革命を想定してカウツキーの、それ自身が發展性を持たない不平等な對立であつた。

レニンは帝國主義論は移行論と独占の形成過程の解明とにおける論理的展開の誤謬と、その叙述方法における過期的意義を併せ持つといふ過渡的性格を有しつゝ、①註1と②註2と結論的には資本主義の發展の段階論の本質規定として帝國主義段階を措定し、その革命的土台の解明から政治的、軍事的動向の諸特徴の傾向的必然性へ段階論の本質的法則性Vを明らかにした。

この修正資本主義の帝國主義段階の發展に對する従来のマルクス主義者達の理論的混濁と實踐的日和見主義を克服したのが他ならぬレニンであつた。レニンはこれを帝國主義論と「四月テーゼ」において、レニンは二段階戦略と労働民主主義から、帝國主義とプロレタリア独裁と世界革命戦略へと革命的

ハ註1とレニンはマルクスの資本論の論理の延長上に、帝國主義の發生を説いてゐる。「自由競争と生産の集積と独占の形成」というシェーマがそれである。しかも、レニンは集積と集中を混同して使用してゐるのである。従つてレニンは意圖して資本論からの論理展開として、原理的に解明し得る競争と集積と、史的な事実である集中と企業合併とが混同されてゐる以上、それ自身があかしののである。こゝに明確な誤りをもつてゐるなら、実際の叙述が大不況期ドイツにおける独占体の形成を具体的に解明して行く中から、段階論として帝國主義の特徴を規定してゐる点に、我々はレニンの帝國主義論

を倒す。プロレタリア独裁と世界革命戦略へと革命的

特徴を規定してゐる点に、我々はレニンの帝國主義論

(1) 過渡期世界の成立

前述したように、ロシア十月革命の勝利は、世界史の資本主義への突入以来初めての非資本主義社会を生み出した。それは資本主義を否定・止揚し、

従って我々は、現象には別者曰くとして定在している過渡期社会をどうに評価し、その世界革命戦争における役割を何なのを考察する時、マルク

我々はロシア革命に引き続くべきヨーロッパ革命

中ドイツ革命の敗北へ註文Vによって取り残され

ハ註文V レーニンのコミンテルンを通じたドイツ

革命への指導は完全なものは云えず、あいまい

批判を中心としており、特にKPRDへ共産党としての

て、マルジョアジに必要の結果、マルジョアジ

能って、こうして一切の困難性、世界革命の未遂

者凶犯におけるプロレタリア階級斗争の原則を放棄

一曰においてプロレタリア権力の維持と同時に、

一曰においてプロレタリア権力の維持と同時に、

結局、我々は晩年のレーニンのコミンテルンにお

その一は、根本的には前記主義の存在に規定さ

ハ註文V、小聖堂主は、日帝制心、日二つの

者凶犯におけるプロレタリア階級斗争の原則を放棄

一曰においてプロレタリア権力の維持と同時に、

一曰においてプロレタリア権力の維持と同時に、

一曰においてプロレタリア権力の維持と同時に、

を至善建設といふ必要。十分条件から、最初は巧妙に隠蔽して、后には全面的にという形で切斷し、或時共産主義にシフトするの時期における小ブルジョアに代表される大衆の「一口社会主義」への自然発生的に排擠していった。レニンはコミンテルンにおいて、愛租私産を勝利しなから、戦略・戦術を「敗北」したと称す。スターリンの暗躍を許すパラボラスと云うに、唯一の「併行者の祖ロソフイ」エトロシアへの「ロソフイ」共産主義者の「口伝」威主義な二枚を助長した。

スターリンはトロツキーとの内外斗争に於ける「一口社会主義」の勝利を基に、世界戦略をソ連擁護にまで高め、口伝革命に於ける時期における「一時的政策であつた」平和共済政策への例は、ズレスト・トロツキーの諸和議を革命戦略へとすり変えていた。スターリン主義革命論は二つとして「一口社会主義」体制の矛盾を二段階戦略として突成していつ段ののであるが、その具体的な批判は次の社会にまわし、この小説文では、二枚を徹底的に止揚したものと、その残りの世界に「一口」革命戦略を後に展開することを待って、批判的対置としておく。

△△△ 過渡期世界

一 攻撃型階級斗争と帝国主義の運動

ロシア革命以後、本更に打ち込大戦中、東欧キユーバ等の革命が成立して、現代世界の帝国主義と併行者国家群が並存する世界である。それはマルクスとユゴワの綱領の意匠におけるもつ、一前の世界が口伝への移行にある過渡期世界であり、世界革命戦争の時代である。

現代世界の社会的地帯を、金融資本主義段階における資本の法的運動の解明として、レニンの帝国主義論を特殊段階の本質と捉えつつ、その段階における現象形態的なる世界認識の方法として「現代過渡期世界論」を指定し、解明せんとするるのである。

過渡期世界論はどの二つのカイズト、現代帝国主義論、現代過渡期社会論の内的・外的運動相違の統一の把握である。故に過渡期社会の概略を述べてきた。それは要するに世界革命への移行期において世界革命戦争を過渡期至善建設を指し、つづつ、口伝の「口伝」全人民的武装革命相地化を待つ

て斗い取らなければならぬ社会である。現代過渡期社会は旧社会の母胎を内的・外的に受けているが故に尚「ロレタリヤ」とブルジョアジーの、従つてこの基底において、資本と労働との階級的矛盾を内に持つが故に、階級斗争は継続しているし、その「口の止揚」不可能である以上、全世界の帝国主義を併合しない限り、それにまつての自己の展望を思い出す社会であり、世界革命の中核となる社会である。

こうして過渡期社会の併行者国家群の成立は帝国主義の運動とどのような関係をもつたのか次に向われなければならない。それは特殊段階の本質的法的解明としてあるレニンの帝国主義論を以て、現代論に適用するのふという向懸であり、その対応はあらゆる資本をふさいでかける標準である。我々はレニンの帝国主義論を資本の金融資本段階における段階的法的解明し、そのものとする。その段階における現象形態的なる世界認識として過渡期世界論を把握する時、現代帝国主義の段階的相違と、そのものはあくまで帝国主義段階として位置付ける。俗語に「口伝」に「口伝」の、現代帝国主義をレ

「レニンの帝国主義」と本質的に「法的性」をもって、襲つたものとして考えるのは、まさに反動的誤謬であり、帝国主義の美化であることと断罪しなければならない。

何故なら、帝国主義は過渡期世界の成立により、自らを製造する運動にあることを宣言されたのち、残存する全地域を世界市場として再編・統一し、資本の法則性の下に依然としてその運動を展開している。それは独立資本主義の全特徴をもつてである。レニンの帝国主義論で明きうたにされ、帝国主義の不均等発展と世界分割は今尚現代帝国主義を根底に置いて規定している。資本の運動は、資本主義制度そのものを打ち倒さなければならない。いかなる法的な力もこれを規制することはできない。このことを理解できないの故に、日本種族共同体論をもつて、カウツキ「手本」に帝国主義を法的運動としておぼろげなく、ブルジョアジーが「めん」を用いる政策と理解し、口伝への過渡期社会の移行期と捉えられている中核の諸君である。しかも帝国主義は世界交通を媒介して、過渡期社会を内的・外的に規制し、それらを自己の「口伝」の一部に組み入れるとする。それ

ている。ハ勿論これは政治的、軍事的に不安定であ
るが、

では過渡期社会の階級闘争は前日主義にどの
よりの影響を与えているのか、過渡期社会の個人
的武装と革命根拠地化への現実はスターリ
ン主義によって歪曲され、即自性に抑圧せられて
いるとは云えない。前日主義の不均等発展と世界分
割と外内に対立し、その現象形態における変容を強
要しているのである。

前日主義は世界分割と対外膨張と侵略を遂行する
時、前日主義の引き起こすその対象は多国籍の人々
の斗いと革命根拠地としての階級闘争との結合に
対する反革命を準備しなくてはならなくなった。前
日主義はその侵略を反革命と統一することなしには
一切自己の進歩を遅滞しえなくなつたのである。

これは他方において、世界プロレタリアート人民
にどうして、二の侵略反革命を自己の一切の権
威の根拠であることが、自己の白々の生活の、至前
的階級の、政治的階級の、反革命の、等々、具
体的に、レムを全世界的規模で同一にあらわされるこ
と意味している。

現代の世界プロレタリアート人民は、過渡期世界
における前日主義の進歩の特殊性（侵略反革命）
によって、統一してこれに抗する根拠を有している。

これは、国際プロレタリアートの結合と世界革命の
發展の契機を、レニンが前日主義戦争を媒介して
て定式化したものに象徴して、興った形において、即ち
その前段階において前日主義の侵略反革命に媒介
されて結合し得る根拠となつてきている。こうして国際
プロレタリアートの登場と世界革命戦争の開始は過
渡期社会の成立による前日主義の進歩の侵略反革
命の統一という形態的変化にどの根拠を有している
か故に、我々は現代過渡期世界の階級闘争を攻撃型
階級闘争と位置付けるのである。

階級に現象の階級闘争はスターリンニスト階級に
よって歪曲され、とり攻撃型階級闘争としての二日社会
主義の体制的矛盾論と二段階革命論、過渡期世界の
特殊性を規定する一要因でありなかり、攻撃型階級
闘争の内容としての国際プロレタリアートと世界革
命戦争の主体階級闘争を、前日主義の反革命に派
生し、攻撃型階級闘争を即自性のままだと認めんと
している。

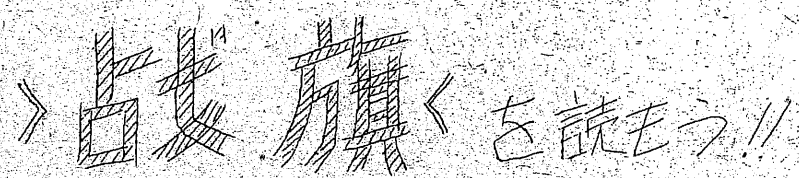
だが今日前日主義はその史上三度目の世界分割戦
に突入していく中で死の苦悶を開始した。ボトナム

人民の英雄的な斗いの弁を突出してこれ時代なら、
現代でローNATO、安南紛争、ボトナム革命階級
に示されるように、前日主義の階級闘争において、后進
国、植民地において、そして階級闘争の内部において、
前日主義の侵略反革命を物質的根拠として受け
つ取れし、階級闘争を激化している。二の激化の時
代は、プロレタリア、ファシズムムカレとして世界革命
戦争に戦化せんとする我々は以下、世界二日同時
革命戦略を提唱していく。

五世界二日同時革命

以下次第に続く

階級者、学生の新聞



社会主義学生同盟 理論戦線 編輯

理論戦線 第 1 号 癸 亥

- 社会学同全大会報告集
- 10/2/1 斗争総括
- 中大、日大斗争総括
- 革命本論
- 和魂斗争記
- 全学連の困難
- 高校生運動論
- etc

「革命の通達」創刊号

発行・編集 社団法人教育大友会

昭和44年4月19日 定価50円